

2020年1月17日

ミャンマーの農村で感じる「懐かしさ」

多様化と国際理解のヒントはまず国内にあり？

アジアコンサルティング部
シニアコンサルタント 天間 崇文

これまでのコラムでも書いてきた通り、ここ数年の筆者はミャンマーの地方都市から農村部を訪問する機会に多く恵まれている。そして、その際にいつも感じるのが不思議な懐かしさである。このように感じるのは私だけではないようで、いろいろな書籍やウェブサイトで、「ミャンマーには懐かしい日本の原風景がある」、「古き良き日本の姿がある」などという記述をしばしば目にする。ミャンマーのどこに郷愁を感じるかは人それぞれだろうが、昭和年代の幼少期を日本の片田舎で過ごした私の記憶と経験に基づいて、甚だ主観的なものではあるが、国と年代を超えた日本とミャンマーの共通点を挙げてみたい。

まず、村落の中で見かける代表的な私にとっての「懐かしい風景」には、以下に示した写真のようなものがある。

[左上]：広大な田んぼは、幼少期の我が家や祖父母の家の前の広い田んぼを思い出させる。バッタやトンボを採集したり、夏の夜のヘイケボタルの乱舞の記憶がよみがえる。

[右上]：畜舎と住居（写真奥）とが隣接もしくは同一である。日本でも、地方によっては同一家屋内で馬と共生していた時代がある。

[左中]：集落内の未舗装路の様子は、幼少期の私の家周辺のそれにそっくりである。

[右中]：幼少期の私の家の周りにも、週末や登下校時に簡単なおやつを買える小規模な個人商店・駄菓子店が1、2軒あった。ガラスケースに入ったお菓子に加え、雑貨や一部の生鮮食品まで揃っていた。

[左下]：生まれて初めて目にした大型バスや外国人に興味津々の村の子どもたち。「あれ何だ？」「どこの国の人だ？」というささやき/心の声が聞こえてきそう。私の幼少期は日本のどこでも子どもが走り回っていて賑やかだった。今の日本の地方部では、過疎化と高齢化で幼少児の姿を見る機会が激減し、寂しいくらい静かになってしまった。

[右下]：幼少期のおつかいでは、ボウルを持って、一斗缶の水に入った豆腐の塊を買いに行ったものだ。ミャンマーの市場の豆腐売り場には、当時の日本とそっくりな光景がある。

(写真) ミャンマー農村部の集落で見られる、懐かしい風景のいくつか



(出所：大和総研撮影・一部加工)

約 40 年前、片田舎の子供であった私はまさに上のような風景に囲まれて育った。このように、ミャンマーの農村を訪問して感じるのは、彼らの生活環境には、40 年以上昔の日本の田舎との共通点が案外多い、ということである。もちろん、より詳しく観察すれば、電力や水道等の基礎インフラの数々で当時の日本の田舎にさえ遥かに及ばない事実にも愕然とさせられる。それでも、短期旅行程度であればそこまでの落差を体感することはまずなく、

私のように「古き良き日本の風景」に心の癒しを覚えるかもしれない。また、業務上でも、私が幼少期の記憶を交えて彼らの生活環境への共感を語ったところ非常に喜ばれ、彼らの積極的な協力のもと大きな成果が得られた、という経験が一再ではない。

一方、今の30代以下の世代で、特に首都圏の都市部育ちの場合は、日本の昔の田舎が今のミャンマーと少なからず似ていたとは想像しがたいのではなかろうか。首都圏への人口の一極集中が進む昨今、若い世代の発信が多いウェブサイトの投稿や出版物を読んでいると、日本の地方都市や農村部の生活への理解が欠けているように（あくまで個人的ではあるが）思うことがたびたびある。つまり、若い世代全体の「経験」や「理解」もまた首都圏都市部に一極集中しつつあるのではないか、と感じられる。この傾向と少子化が更に進めば、開発途上国の、とりわけ農村部の生活に共感できる人材が急速に減るのでは、と心配になってしまう。

様々な側面で多様化が進む今後の国内および世界では、異なる社会環境や価値観への相互理解を深めることが一層重要になることは論をまたない。そのためにも、首都圏の、特に都市部に生まれ育つ若い世代には、旅行はもちろん、首都圏外への進学・就職・移住等の経験を通じて、国内の様々な風土と歴史にもじっくり触れてほしいと思う。環境ごとに異なる生活様式や価値観を直に体験することは、社会が多様化・国際化するこれからの時代に順応していく上での大切なヒントを与えてくれるだろうから。

－（本文）以上－